

■ 書 評



精神科 身体モニタリング塾

古郡規雄 著
新興医学出版社
2018年7月 168頁
本体価格 2,500円+税

手に取ると、思いのほかコンパクトで、白衣のポケットにも違和感なく入りそうなサイズ感であるが、内容はけっして薄くない。外観と書名から推察されるように精神医学の初学者向けのマニュアル本でもあり「身体」からみた精神医学のエビデンスと著者の経験のナラティブを一冊に詰め込んだ、手のひらサイズながらも野心的な一冊、というのが読み切った最初の感想である。従来のテキストとは異なるイレギュラーな章立てにも本書の野心がうかがえる。まず最初の1章目に「特殊な病態を持つ患者への薬物療法」として、小児・高齢者・肝機能障害・腎機能障害における薬物療法の注意点からはじまり、2章 抗精神病薬、3章 情動安定薬、4章 抗うつ薬、5章 抗不安薬（と睡眠薬）という構成で、末尾には「付録」というには十分すぎる紙面を割いて、妊娠中の向精神薬処方上の留意事項について述べられている。

また本文も教科書というより、受験生向けの参考書というのが似つかわしい。大きな文字を囲みで強調し、見開きを一目見て要点がつかめる体裁と、多めに配置された図表によっても、初学者の理解を助け、また臨床疑問についてピンポイントで調べたいときにも適している。

扱っている内容・視点にも独創性があり、例えば主だった抗不安薬の章において、作用の強弱についての表と、常用量依存と離脱、減量の方法について、詳細に論じられる成書は珍しく、初学者のニーズに沿ったものと感じられた。悪性症候群

や、遅発性ジスキネジア、抗うつ薬離脱症候群など重大な身体副作用については、複数の診断基準や、国際的な副作用評価スケールについても引用され、単に症状を列挙し著者の印象・経験のみで語らず、引用文献も抜かりなく引用されているあたりが、他の若手医療者向けの「ライトな参考書」とは一線を画している。

また、エビデンスに基づいた診療の外にも踏み込んだ記載がある点も注目される。スルピリドやトラゾドンなど、効果を実証する研究の蓄積がないものの、臨床上よく登場する薬剤について、いわば「裏技」的な使い方の記載がさりげなく含まれているのは、経験豊富な専門医にとっては議論の余地がある部分かとも思われたが、まだ手探りの診療で、目の前の患者の病態に難渋している初学者への救いの手ではないか？

同様に短い一言コラムと、長めのコラムが2~5ページに1回は挿入されており、この一角も診療上、誰しもつまづきやすい場面が率直に表現されている。特に失敗事例は、薬物療法の副作用に関するリアルな臨床場面の描写がなされており、コラムだけ読む価値もあると思われた。うまくいかなかった経験も惜しげなく提示する著者の本書への意気込みが感じられる。

全章を通して、精神科医療を精神症状や社会心理面からではなく、あえて身体的な側面から「診る」診療視点にこだわるのが本書の特徴であるが、これは精神症状を診ないのではなく、身体の方により現れやすい、言葉を介さないメッセージを汲み取るべき工夫・試みとあってよく、従来の精神医学と違った目線で、今まで見落としてきた部分を注視しようという試みと思われた。

精神疾患の身体的な問題への適正対処のまとめと、ガイドラインには書かれない「経験知」を両方携帯できるパワフルかつ軽装な、このモニタリング塾の次なる展開に期待したい。

(今村弥生)